

## 娘がくれた、大きなギフト

田中圭子

子どもが学校に行かないことで、人生で大きなものを失ったと私は思っていた。

娘は小学校1年生だった。毎日お友だちが迎えに来て、体より大きいピカピカのランドセルを背負って、学校に張り切って行っていた。

今でもその時のことを思い出すと涙がこみあげてくる。

娘は朝、学校に行く時間にお友だちが迎えに来てくれて、ランドセルを背負っているのに、玄関で突っ立ったまんまになった。

私は当然、「何をしてるの？ 早く行っておいで」というのだけど、動かない。「ほら早く！」「急ぎなさい！」「お友だち待たせちゃうでしょ！」「どうして行かないの！」「遅刻するでしょ！」 何度こういう言葉を娘に浴びせただろう。

娘は言葉にならず泣き喚いていた。あとからわかったことなのだけど、学校で怖い映画を見たのがきっかけだったらしい。それでも私は娘のサインをまったく見ていなかった。自分のことでいっぱいだった。

学校に遅刻したら先生にも迷惑をかける、待たせている友だちに悪い、玄関先でやりとりするとご近所にも恥ずかしい……。

私の頭の中はただ一つ、「どんなことがあっても学校を休ませてはいけない」だった。何の疑いもなかった。このまま休ませると怠け癖がつくと心配した私は必死になった。なだめすかせて、学校まで連れて行った。

これはそれから毎朝続いた。

車に無理に乗せて連れて行ったこともある。学校行ったら大好きなケーキを作って待っていてあげると言ったこともある。先生に毎朝迎えに来てもらったこともある。罪悪感を刺激するような言葉を使ったこともある。頑張り表を作ったこともある。病院にも心理センターにも行った。学校に行けるようにと考えられる限りの、あの手この手を尽くした。

でも、やっと学校までたどり着いても、校門の前で娘は足が動かなくなる。下駄箱まで行くのに一時間かかることもあった。教室に着くのに給食が終わってしまったこともあった。

冬の冷たいコンクリートの階段の途中で、何時間も二人でいたこともあった。階段を通る子ども、先生の目が心に痛かった。声を掛けられるたびに楽しくもないのに作り笑顔で答える私自身が情けなかった。「何をやっているんだろう私は」 心で泣いた。

こういう毎日がいつまで続くのだろう。何をやってももうまくいかない。なぜうちの子だけ「普通に皆と同じように」行けないのだろう。

“不登校”とは認めたくなかった。わが子が、新聞とかで社会問題になっている不登校だなんて、

受け入れられない。認めると押しつぶされそうになる気がした。「ちがう」といい聞かせていた。

だんだん娘の顔からも生気がなくなっていった。私も心から笑うこともなくなった。

何かに追い詰められてた。その何かはその時はわからなかった。

娘は情緒不安定になった。「学校に行きたいのに行けない」と毎朝泣いて、パニックになった。運動もしてないのに体が筋肉痛になった。「今日は学校に行く」と言うと、私も「学校にこれで行けるようになる」と喜んで、少しでも急かすと、髪型が気に入らない、靴が合わない、と言っては玄関先で泣き喚いた。そして学校に行けない。こういうことの繰り返し。

私の傍を離れず、体に触れていた。トイレも家の2階にもすべて一緒にいないと不安になる。私は物理的に仕事ができなくなってしまった。やめるしかなかった。

追い討ちをかけるように、まわりからの「甘やかしてるんじゃない？」というなにげない言葉。無理して聞いていたが辛かった。

そんな生活がそれから3年は続いた。

しかし、辛さの底はそれ以下には決して行かなかった。夫が本を数冊私に渡してくれたのだけど、その中の一冊がホームシューレが出している「子どもは家庭でじゅうぶん育つ」(東京シューレ編、東京シューレ出版)だった。

「ホームエデュケーション」という知らない言葉が書いてあった。学校に行かない子はダメという価値観と全然違う、家で生き生きとその子らしく育つという道があるんだ、肯定的な生き方があるんだと初めて知った。私の学校に行かすべきという価値観が少しずつやわらかくなってきた。それから、ネットの情報、本屋さんで不登校関係の本を見つけると片っ端から読んだ。いろんな本を読んで思ったのだけど、どの本を読んでも、ホームエデュケーションという子育ての仕方がずっと頭にひっかかっていた。

そういう知識が私の中で満たされてきたときに、パンッと弾けた。

「どうせ毎日学校に行かないのなら、こうやってじっと家にいるのではなく、楽しいことをしよう！」その時が私達のホームエデュケーションライフの始まりだったのだと思う。

今までのことを取り戻すかのように、最初のころは、映画、科学館、美術館、料理教室、体験講座、公園でドッジボール、ランチ、自転車で気の向くまま出かける、お菓子作り、庭にテントを張ってキャンプごっこ、プール、図書館めぐり……とにかくいろんなことをした。

毎日を丁寧に大事にすごしたいと思うようになった。忘れていた娘の笑顔を見ては、なんだかこの日々がありがたく感じて涙ぐんだ。私自身も本当に今までのことがウソのように楽しくなった。笑っている時が多くなった。子どもと冗談を言い合うようになった。

考え方の方向が変わるだけでこんなにも子どもを愛おしく思えるなんて思わなかった。今まで私は子どものどこを見ていたのだろう。

娘が学校に行けなくなって4年。

娘との毎日のお出かけは、少々落ち着いて、それぞれにゆっくり好きなことをして過ごすこともあるし、お買い物と一緒に出かけることもある。同じようにホームエデュケーションをやっているお友だちと時間を気にせず遊ぶこともある。

一人でいろんなことをするようになってきた。ホームエデュケーションのお友だちといたずらに花が咲いて、ママたちから叱られることもある。おてんばになってきた。思春期街道を進んでいるので、この前はこちらもドキドキ緊張しながら性教育をやった。神妙に聞いていた。これこそが私の親としての役目だと思った。

今小5になる娘が、「私、学校行けないのが気にならなくなったのは、お母さんが『楽しいことしようよ』と言ったからだよ」と言ってきた。涙が出た。「前に学校に行かすことばかりを言ってごめんね、そして生まれてきてくれてありがとう」と娘をギュウツと抱きしめてしまった。一番大切なことに気づいてよかった。学校に行かせることよりも大事な「今ここに子どもと共に生きる喜び」を一緒に味わえたから。

学校に行かないことで大きな物を失ったと長いこと思い込んでいたが、結果、それ以上の大きなギフトを得たんだなとつくづく思う。

※この体験記は、『ホームエデュケーション始めませんか』(NPO 法人 東京シューレ編)より、  
了解を得て抜粋させていただきました。

★(参考)→ <http://www.homesure.jp/> ホームシューレ(東京シューレ内)